

ぼんぼん時計

JSPS Bonn Office

独立行政法人 日本学術振興会 ボン研究連絡センター
四半期報告

(2006 年 10 月～2007 年 3 月)

2007 年 6 月 12 日
小山佐和

前任の樋口副所長から引継ぎ、10 月から本報告を担当することになりました。小山佐和と申します。前副所長の厚みある報告には遠く及びませんが、今後どうかよろしくお願いいたします。

恐らく、ボン研究連絡センターに赴任した誰もが、特に日本人の方に尋ねられる質問として「何故、ボンなんですか？もうすぐベルリンに移転されるんですか？」というものがあつたのではないのでしょうか。

1990 年に首都がボンからベルリンに移転して以来、ボンが当時の西ドイツの首都であつたという記憶は、日本人の意識からは遠のきつつあるのかも知れません。ドイツ文学者の池内紀先生の著書など読むと、 BON は、ドイツ人からも「Hauptstadt(首都)」(「Haupt=主要な」「Stadt=都市」から成る)でなく、「Hauptdorf」(「dorf=村」と)揶揄されていたとのことで、街を歩いても「ここが首都機能を有していた」ということは思えないほど、静かで時の流れがゆっくりしています。

そもそも、現在、日本からボン研究連絡センターに来るために一番簡単な公共交通機関としては、フランクフルト空港から ICE スプリンターに乗る方法がありますが、これもボン中央駅に停まれるスペースがなく、ライン川の対岸の Siegburg という駅に到着し、その後ケルンへ行ってしまいます。この駅に公共交通機関を用いてボンから行こうとすると Uバーンで 30 分かかります。成田空港から出る特急が東京駅に着かず、海浜幕張駅には停まるけれど、その後は新横浜駅まで行ってしまうような感覚です。海浜幕張駅からわざわざまた川を越えて東京まで行かないと行けないのです。しかも、この路線は 3 年ほど前に開通したもので、ボンが首都だったときにはフランクフルト空港から 2 時間列車に揺られるか、ケルン・ボン空港へ乗り換えるか、などが必要だったそうです。ベルリンも日本からは直行便がありませんので、日本からは不便ですが、いずれにしても、「何故、ボンが首都だったのか？」という疑問には、ドイツ人でもなかなか答えられないらしく、「個人的見解では」という断りが入ったうえで「アデナウアー首相の出身地だったから」等、もっともらしいようなそうでないような答えが返ってきます。

そんなボンですが、全欧的な学術振興組織として結果、研究機関分布が描かれるだろうと予測されている欧州研究協議会 (ERC) のモデルが我々のドイツの対応機関であるドイツ研究会議

(DFG) であるなど、欧州の学術研究に於けるドイツの役割が重みを増す中、対応機関や他の行政機関等が開催する会議やレセプションなどで、ボンが学術としてあるということがよく強調されます。連邦教育研究省があり、国連大学があり、マックスプランク研究所以外の JSPS のパートナー機関が揃い、特に DFG の職員とは、昼食時に食堂で見かけ、挨拶できる距離にあります。こういうことは、心理的距離を縮め、数値にできない「ボンにある意味」ではないのでしょうか。

1. ドイツ連邦レベルでの学術動向

♪ ドイツ研究会議（DFG）、ドイツ研究評議会、及び州研究大臣会議がエクセレンス・イニシアチブの第一期募集に選考結果を公表

http://www.dfg.de/forschungsfoerderung/koordinierte_programme/exzellenzinitiative/index.html

(DFG ホームページ、エクセレンス・イニシアチブのページ)

http://www.dfg.de/aktuelles_presse/reden_stellungnahmen/2006/exzellenzinitiative_0610.html

(DFG ホームページ参考資料集)

http://www.dfg.de/aktuelles_presse/reden_stellungnahmen/2006/download/exin_0610_pressemappe/exin_061013_state_ment_schavan_en.pdf

(シャバーン連邦教育省大臣声明)

http://www.dfg.de/aktuelles_presse/reden_stellungnahmen/2006/download/exin_0610_pressemappe/exin_061013_state_ment_winnacker_en.pdf

(ヴィネッカー前 DFG 会長声明)

http://www.dfg.de/aktuelles_presse/reden_stellungnahmen/2006/download/exin_0610_pressemappe/exin_061013_state_ment_strohschneider_en.pdf

(シュトロースシュナイダー WR 会長声明)

10 月 13 日、学界からも政界からも注目を浴びてきたエクセレンス・イニシアチブの第一期採択大学（課題）が発表された。連邦研究教育省シャバーン大臣は、この日を「ドイツの学界にとって最も大切な日」と位置づけた。純粋に学問上の卓越性に基づく選考がなされることが求められる一方、統合後なお地域間格差があるドイツに於いて政治的配慮の問題も挙げられていたところ、大臣は、今回の決定が満場一致であったことを強調したうえで、一文で次のように語っている。「この事業の 2 回の募集においては、地域を配慮せず科学的卓越性のみを基準とするべきであるということを、本日の会合に於いて満場一致で決定した。(右からの拙訳：”The Consensus in today’s meeting was that the only relevant criterion for both funding rounds should be scientific excellence, without regard to regional considerations 原文ドイツ語)」

エクセレンス・イニシアチブは、下の概要に挙げるとおり、3 本の柱から成り立っており、ドイツ研究会議（DFG）が「大学院(Graduate Schools: Graduiertenschulen)」及び「エクセレンス・クラスター(Clusters of Excellence: Exzellenzcluster)」を審査を担当し、ドイツ研究評議会（Wissenschaftsrat: WR）が「将来構想(Institutional Strategies: Zukunftskonzepten)」の審査を担当している。

「大学院」及び「エクセレンス・クラスター」に関しては、DFG ヴィネッカー会長（当時）(Prof. Dr. Ernst-Ludwig Winnacker)が、声明において概要次のとおり審査の方法及び結果を公表している。

2006 年 1 月に第一期予備審査を通過したのは、36 大学から提出された、「大学院」39 件と「エクセレンス・クラスター」39 件の計 78 件である。審査は 24 の専門家部会に於いて（夏に 4 週間近隣のホテルに缶詰になって審査したそうである。）「絶対評価」で行われた。審査員は約 300 人で、ドイツ人は 10%のみで、ドイツ外の欧州から 60%、それ以外の国からは 30%という割合であった。また、下に述べるように「将来構想」は、「大学院」と「エクセレンス・クラスター」の双方に採択されなければならな

いことを、ヴィネッカー会長は、「確固たる学問的卓越性がなければエリート大学たり得ない」とプログラムデザインを評価している。また、ドイツの大学が組織として変貌する要素として、若手研究者と女性研究者の振興が鍵であるとも述べている。

「将来構想」に関しては、WR シュトロシュナイダー会長(Prof. Dr. Peter Strohschneider)が、声明において概要次のとおり審査の方法及び結果を公表している。

2006 年 1 月に第一期予備審査を通過したのは、全 27 大学中 10 大学であった。審査は 1 大学あたり 2 日間の実地調査形式で、戦略委員（審査員）のうち 2 名ずつで実施した。審査は、専門家により実施され、うち半分は 11 カ国から選ばれた外国人審査員で、半分がドイツ人であった。学界において指導的立場にあったか、産業界における代表により構成され、若手研究者もしくは男女共同参画の振興又は高等教育運営のエキスパートが多く、女性の割合は 17%であった。実地調査は、将来構想のプレゼンテーションの聴取のみでなく、大学の事務組織、協力相手、同大学地域の代表者との議論をとって実施している。審査に於いては利害関係者は当該大学の審査及び比較協議に関与しない工夫もされた。

なお、シュトロシュナイダー会長は、本審査プロセスに関し、個人的な印象と断りながらも次のように述べている。

- 1) 外国人審査員はドイツの大学の研究業績の高さに感銘を受けた。ドイツの研究システムの効率の高さは他に比類する物がない。ただし、よく見るとドイツのシステムは競争力が無い。スタッフと学生の比率、教育負担、大学の資金不足が例として挙げられた。
- 2) 将来構想の関係者は皆、開拓精神と障害を乗り越えることに前向きであり、機関の一員であるという意識が高く目的と戦略を共有している。大学の将来構想を誰もが共有しているため、構想のプレゼンテーションでスタンディング・オーバーションが起こることもしばしばあった。

＝エクセレンス・イニシアチブの概要＝

1) 事業目的

プレスリリースなどで使用されている表現は、The “Excellence Initiative” aims to both promote top-level research and improve the quality of German universities and research institutions, thereby making a significant contribution to strengthening science and research in Germany in the long term, improving its international competitiveness and raising the profile of the top performers in academia and research. である。

拙訳「「エクセレンス・イニシアチブは、以って将来のドイツの学術研究を強化し、国際競争力を向上させ、及びドイツの学術研究における研究主体の存在感の向上に重要な貢献を果たすために、トップレベルの研究を振興し、ドイツの大学及び研究機関の質を向上させることを目的とする。」

2) 予算

2006 年から 2011 年までの総計 1.9 億ユーロ（1 ユーロ＝155 円換算で約 2,945 億円）を予定。公募回数は 2 回で、2006 年から 2010 年までを支援する第一回公募について、873 百万ユーロ（約 1.350 億円）が支援される予定。次回の公募は 2007 年から 2011 年までを支援するもので、2006 年 9 月に公募が締め切られている（したがって、第一期採択大学（課題）発表（10 月）より早い。第 2 期は第 1 期に不採択となった大学（課題）も再度考慮される）。

3) 実施件数

エクセレンス・イニシアチブは、次の 3 つのカテゴリーに分けられている。プレス・リリースに記載されている表現は次のとおり。

①大学院

採択された大学院は、ドイツ国内での研究におけるトップレベルを目指すのみならず、存在感と名声を向上させる重要な役割を果たさなければならない。大学院は若手研究者の質の保証と優れた研究環境における卓越した博士課程在学生の主たる訓練機関としての機能を果たす。したがって、大学院は学術における広い分野において理想的な条件を提供し、国際的に知名度を上げる統合研究機関として在学学生を学術及び社会において活発に活動する構成員となるよう促すこととなる。この観点から、大学院は DFG のリサーチ・トレーニング・グループと異なる機能を持っている。

②エクセレンス・クラスター

エクセレンス・クラスターは、ドイツの大学の所在地に国際的に知名度が高く、競争力のある研究および研究設備を確立し、その周辺に学術ネットワークと参加研究所との協力を強化することを可能にする。エクセレンス・クラスターは、大学の戦略的・主題的計画の重要な部分を構成し、存在感を顕著に高め、長期的将来構想を反映するため、大学において重要な役割を担う。また、若手研究者にとっての優れた訓練及びキャリアを創設する。他の 2 本の柱と共に、エクセレンス・クラスターは、将来的に、研究の場所としてのドイツの魅力を高め、ドイツの国際競争力を高めることに役立つ。

③将来構想

エクセレンス・イニシアチブでは、ドイツにある大学におけるトップレベルの研究を振興し、国際競争力を強化することを目的とした機関戦略に対する支援をする。この経費は、将来的に国際的卓越性の高い研究分野を発展拡大させ、国際競争の中での先導的機関として大学の地位を確立するあらゆる手段に利用できる。これにより、将来、ドイツにおける学術研究を強化し、現在の学術的卓越性をより際立たせることに重大な貢献をする。

このうち、2 回の公募で採択される予定の実施件数は、

①大学院：約 40 件、②エクセレンス・クラスター：約 30 件、③将来構想：約 10 件であるが、第 1 回公募における採択件数は、①大学院：18 件、②エクセレンス・クラスター：17 件、③将来構想：3 件であった。

4) 支援額

1 件あたりの年平均支援額は次のとおり。（[] 内がプレスリリース上の発表）

- ① 大学院：100 万ユーロ（1.6 億円）[第一次経費の 12.7%]
- ② エクセレンス・クラスター：650 万ユーロ（10.1 億円）[第一次経費の 63.4%]
- ③ 将来構想：6,955 万ユーロ（108 億円）[第一次経費の 23.9%]

5) 支援期間

5 年間

6) 経費の使途範囲

① 人件費、②計画に係る直接経費、③設備備品費 このほか、事務局員、博士課程の学生の雇用、広報にも充当可能。ただし、学内にマネジメントのための委員会を設け、同委員会において使用の可否を決定することが必要。同マネジメント体制については、申請書に記載箇所がある。

7) 間接経費の有無

直接経費の 20%を付加。

8) 研究分野・テーマの指定

すべての学問分野において申請可能。

9) 対象機関

大学。

10) 申請資格

ドイツの大学であること。大学以外の研究機関との協力によるものであることが望ましい。また、「③将来構想」に於いては、①大学院及び②エクセレンス・クラスターに於いて、最低一件ずつ採択されていることで初めて最終審査に申請する資格が付与される。

1 1) 審査の観点

3つのカテゴリー全てについて、以下に掲げる要件を満たすこと。

- 1) 最低一分野において、研究及び若手研究者の要請に卓越性を有すること。
- 2) 学問分野のネットワーク及び国際研究ネットワークの創設にかかる総合概念を有すること。
- 3) 大学間協力や、大学以外の研究機関との協力により成り立つこと。

このほか、学術における男女の機会均等の促進に目指した手段の有効性を有すること。

1 2) 審査方法・体制

DFG、ドイツ研究評議会、州研究大臣会議の三者による共同審査。予備審査と本審査による二段階審査。予備審査は、外国人審査員を含めた国際審査委員会に諮られ、相対評価による。DFG 及び独研究評議会による共同審査会において「将来構想」に申請する資格も審査される。共同審査会が大学に最終審査への申請資格を付与する。共同審査会の推薦をもとに最終審査のための申請を DFG が指名した補助金審査委員会において、最終審査が実施される。

（別添の「エクセレンス・イニシアティブ：審査及び決定方法」ご参照）

1 3) 審査結果の公開

項目別に次の WEB を参照されたい。

基本的に、①大学院及び②エクセレンス・クラスターについては、採択大学、課題リストが掲載され、同リストから各大学の責任者氏名及び連絡先に DFG 内リンクが張られ、同ページから各大学のホームページにリンクが張られる作りである。（不採択課題については、触れられていない）

①大学院

http://www.dfg.de/en/research_funding/coordinated_programmes/excellence_initiative/graduate_schools/list/gsc_gesamt.html

②エクセレンス・クラスター

http://www.dfg.de/en/research_funding/coordinated_programmes/excellence_initiative/clusters_of_excellence/list/exc_gesamt.html

③将来構想

採択大学名は公開されているが、上記に相当するリストは公開されていない。

1 4) 中間評価の方法・体制機関のシステム変革への貢献度

2009 年に連邦政府及び州政府により事業の継続の可否が検討される。継続の場合、助成開始 4 年後に評価が実施される。評価は、DFG が共同審査委員会の推薦を元に支援の継続の可否を決定する。

1 5) 機関としてのマネジメント体制

同事業は、ドイツの大学の学内制度そのものを主体的かつ独自に変革することを期待したプログラムである。学内に設ける同事業を運営する委員会について記載する欄が申請書にある。

♪ エクセレンス・イニシアティブ第二期募集予備審査結果：35 大学が本審査へ進む

http://www.dfg.de/en/news/press_releases/2007/press_release_2007_01.html

(DFG ホームページ Press Release No. 1)

12 January 2007

エクセレンス・イニシアティブの選考は、ドイツ研究会議（DFG）専門家委員会とドイツ研究評議会（WR）の戦略委員会の委員により構成される共同委員会が実施するが、2007

年 1 月 12 日の会議において第 2 期の募集へは 305 件の申請があったことを公表した。内訳は、「大学院(Graduate Schools)」及び「エクセレンス・クラスター (Clusters of Excellence)」は併せて 278 件で、DFG に提出された。「将来構想 (Institutional Strategies)」は 27 件で、WR が評価した。

今回の予備審査を経て、本審査に進める各大学毎のプロジェクト数は、下の表の () 内のとおり。大学数としては 35。(昨年度は採択されたが、今年度は名前が挙がっていない大学もカールスルーエ大学、ギーセン大学、ドレスデン大学のように 3 大学あり、下表にはその大学も記載されているため表中の大学名は 38 挙げられている。) また、「将来構想」に関しては、ボーヘム大学、コンスタンス大学、ゲッティンゲン大学のように、今回は「大学院」または「エクセレンス・クラスター」しか本審査に望むこととなっていなくても、昨年度どちらかに採択されているため、「大学院」及び「エクセレンス・クラスター」の両方に採用されなければ本審査で審査される権利が無い「将来構想」へ手続きを進めることができていることがわかる。

	大学院		エクセレンス・クラスター		将来構想
	第一期採択数	第二期候補数	第一期採択数	第二期候補数	● 第一期採択 ○ 第二期候補
今期大学数 (35)					
バーデン・ビュッテンブルグ州 (7)	4	(10)	3	(9)	1-3
University of Constance		(2)	1		○
Albert Ludwigs University of Freiburg	1	(2)		(3)	○
Ruprecht-Karl University of Heidelberg	1	(3)	1	(3)	○
University of Karlsruhe	1		1		●
University of Mannheim	1			(1)	
University of Stuttgart		(2)		(1)	
Eberhard-Karl University of Tübingen				(1)	
University of Ulm		(1)			
ノルトライン・ヴェストファーレン州 (7)	3	(7)	3	(8)	0-2
RWTH Aachen University	1	(1)	2	(1)	○
University of Bielefeld		(1)		(1)	
Ruhr University of Bochum	1			(1)	○
Rhineland's Friedrich Wilhelm University of Bonn	1	(2)	1		
University of Cologne		(2)		(2)	
Westphalian Wilhelm University of Münster		(1)		(2)	
University of Paderborn				(1)	
バイエルン州 (5)	4	(3)	5	(5)	2-0
University of Bayreuth		(1)		(1)	
Friedrich-Alexander University of Erlangen-Nuremberg	1	(1)		(1)	
Ludwig Maximilian University of Munich	1		3	(1)	●

Technical University of Munich	1	(1)	2	(1)	●
Julius Maximilian University of Würzburg in Bavaria	1			(1)	
ベルリン (3)	3	(6)	0	(7)	0-2
Free University of Berlin	1	(2)		(3)	○
Humboldt University of Berlin	1	(4)		(2)	○
Technical University of Berlin	1			(2)	
ヘッセン州 (2)	1	(4)	2	(2)	0-0
Darmstadt University of Technology		(3)		(1)	
Johann Wolfgang Goethe University in Frankfurt am Main		(1)	1	(1)	
Justus-Liebig-University of Giessen	1		1		
ニーダーザクセン州 (2)	1	(2)	2	(2)	0-1
Georg August University of Göttingen		(2)	1		○
Gottfried Wilhelm Leibniz University of Hannover	1		1	(2)	
シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン州 (2)	0	(2)	1	(1)	0-0
Christian Albrechts University of Kiel		(1)	1	(1)	
University of Lübeck		(1)			
チューリンゲン州 (2)	0	(3)	0	(1)	0-0
University of Erfurt		(1)			
Friedrich Schiller University of Jena		(2)		(1)	
ザールラント州 (1)	0	(1)	0	(1)	0-0
Saarland University		(1)		(1)	
ザクセン州 (1)	1	(1)	1	(1)	0-0
Technical University of Dresden	1		1		
University of Leipzig		(1)		(1)	
ラインラント・プファルツ州 (1)	0	(3)	0	(0)	0-0
Johannes Gutenberg University of Mainz		(3)			
ブレーメン (1)	1	(2)	0	(2)	0-0
University of Bremen	1	(2)		(2)	
ハンブルク (1)	0	(0)	0	(1)	0-0
University of Hamburg				(1)	
各期採択数・候補数	18	(44)	17	(40)	3 (8)

*州（及び3都市）毎にまとめた。各州名のセルに掲げられている（ ）は、第二期に本審査に望む大学数。ブランデンブルク州、メクレンブルク・フェアポンメルン州及びザクセン・アンハルト州の大学は第一期にも第二期予備審査にも残っていない。

共同評価委員会において第一期に不採択となった大学（課題）も再審査対象となるため、今回の募集に於いては、新規の募集のみならず、再申請書も評価された。305 件のうち、新規応募件数は、2006 年 9 月の締切りまでに、70 大学から 261 件で、DFG に提出された。

305 件の内訳は、「大学院」は再審査：16 件、新規：118 件、計 134 件。「エクセレンス・クラスター」は再審査：21 件、新規：123 件、計 144 件。「将来構想」は再審査：7 件、新規：20 件、計 27 件である。

「大学院」及び「エクセレンス・クラスター」は 27 の国際ピアレビューパネルに諮られ、学問上の質、学際性、国際的卓越性及び、大学以外の研究機関等の地域研究機関との協働の観点から評価が実施された。

今回の予備申請書においてはかなり分野がバランス良く分散し、人文・社会学、工学、ライフサイエンスはほぼ同割合であったが、自然科学がやや少なかった。人文・社会学は第一期よりも申請件数が多く、ライフサイエンスと共に、「大学院」においては、工学、自然科学よりも申請件数が多かった。

地域的な分散の状況は、前回既に検討したドイツの南部地域のほか、ノルトライン・ヴェストファーレン州及びベルリンからの申請が多かった。旧東独の州の中では、チューリンゲン州及びザクセンが検討したと言える。

「将来構想」の予備審査は複雑で、審査基準のすべてが考慮される。予備申請書、当該大学の近年の研究業績、及びその動向の審査のほか、（審査員の）研究分野が細分化していることを補い、比較を可能にするために審査グループがいくつも結成され、当該分野の専門家の意見も考慮された。

第二期の「将来構想」審査においては、本審査を受けるため本申請書を提出できる大学が南ドイツに偏ることなく、ノルトライン・ヴェストファーレン州、ニーダーザクセン州及びベルリンの大学も選ばれた。これらの大学は多彩で、専門大学から総合大学まで、工科大学、医学部もある大学もない大学もあり、歴史の長い大学も若い大学もある。

「将来構想」の本審査を受ける大学はこれからが正念場である。「大学院」及び「エクセレンス・クラスター」の両方に採択されているという審査基準を満たすというだけでなく、研究業績及び今後、トップレベルの研究を振興するという予備申請書に記載した機関戦略が同大学の国際競争力と比較されるのである。よって、どんなに良い大学でも本審査を提出資格を持ち得ない大学も出てくるのである。

本審査の申請書提出は 2007 年 4 月 13 日が締め切りであり、夏に審査され、2007 年 10 月 19 日のエクセレンス・イニシアチブ・補助金委員会（the Excellence Initiative Grants Committee）が最終判断をくだすこととなる。

「大学院」は 40 件程度、1 大学院あたり一年度平均 100 万ユーロ、「エクセレンス・クラスター」は 30 件程度、1 クラスターあたり一年度平均 650 万ユーロ、「将来構想」は今回何件採用になるかはわからないが、これと同程度と見込まれている。5 年間に 1.9 億ユーロがエクセレンス・イニシアチブのためにファンドされる予定である。第一期に採択された COE に既に 873 億がファンドされる（「大学院」18 件、「エクセレンス・クラスター」17 件、「将来構想」3 件）ことになっているので、第二期には約 1 億円分が採択されると見込まれる。

エクセレンス・イニシアチブでは、ドイツで初めて間接経費が導入される。装置の調達やレンタルコストなどの研究費に当てることができ、20%が直接経費のほかに付加される。

♪ フンボルト財団(AvH)、ドイツテレコム財団及び公益法人ドイツ学術振興寄付連盟の共催による「ウェルカム・センター」事業開始

http://www.humboldt-foundation.de/en/aktuelles/presse/pn_archiv_2006/2006_25.htm

(フンボルト財団ホームページ)

フンボルト財団戦略部研究者流動性センター担当課長バーバラ・シェルドン博士へのインタビュー

(2007 年 2 月 6 日)

<http://www.humboldt-foundation.de/de/programme/welcomecentres/doc/brochure.pdf>

(フンボルト財団応募結果報告書)

フンボルト財団は、2 年間の事業検討期間を経て（以前の「ぼんぼん時計」掲載記事は次のとおり <http://www.jsps.go.jp/j-news/data/kaigai03/05.pdf>）、2006 年 3 月にウェルカム・センターの公募を開始、同年 7 月に応募を締切り、審査会を経て 10 月末に採択大学を決定、2007 年 1 月から採択 3 大学のウェルカムセンターに対する支援を開始した。同財団は、ドイツの最大手電話会社であるドイツテレコム財団及び公益法人ドイツ学術振興寄付連盟の共同支援を得て、1 大学あたり 2 年間で 125,000 ユーロ（約 2,000 万円）の支援を実施する。ドイツには、区分の方法にも寄るが、約 80 の大学があり、その 3 分の 1 以上である 32 大学から応募があった。JSPS が文部科学省から受託している「大学国際戦略本部強化事業」との興味深い一致点として、我が国では 700 余りの大学の中から、20 大学の国際化を支援しているが、ドイツにおいても、100 弱の大学の中か 3 大学の国際化を支援しているという点で、ドイツ側も予算の都合で 3 件にしたとのことであるが、支援する大学の割合としては偶然にもほぼ一致している。

また、これまで各研究室が個別にノウハウを蓄積してきてはいるが、同じ大学でありながらも隣の研究室では全くそのようなノウハウが蓄積されていないという状況が発生しており、大学が組織的に Welcome Centre を国際課又は学長室の直下に置き、ノウハウ及び情報の一元化を図り、大学全体として国際化に取り組むことを支援しているという点で、概念的方向性の一致が見られる。

更に、ドイツの大学に於いては、外国人の受入という点では、教育つまり留学生の受入については国際課がこれまで学内で受入担当機関として機能していたが、研究者の受入は上記のとおり個別の研究室の関心事項として捉えられていたために、大学における組織整備の必要性が問われていたという点も我が国の大学の事情と類似点が見られるが、教育と研究の不可分の観点から多くの大学において、国際課との連携、学長の直轄下に置くことに解決策を見出しているところに、我が国の大学との検討の方向性の一致が見られる。

ただし、Welcome Centre が大学国際戦略本部強化事業と異なる点は、Welcome Centre が外国人研究者が来独するにあたり、入国、日常生活から研究生活に至るまで、快適に暮らせることを如何に工夫して実施できるか？という点に事業のポイントを集中させている点にある。大学国際戦略本部事業よりも支援金額が少ない理由はここにあるとも言える。

これは、例えば既に、エクセレンス・イニシアチブのような事業により研究教育機関としての大学の最先端化を図る一方で、研究を支える環境がそのような最先端化の理念及び実施に追いつかない部分があるが、これはコインの両面のようなものであり、環境整備が欠落しているのは、結局、優秀な研究者にとっては魅力的に映らない点を重視している。

大学の反応は、既に上記に記載したとおり、全大学の 3 分の 1 が応募し、エクセレンス・イニシアチブのように大々的に公募した事業とほぼ同時期に募集しているにも関わらず、多くの大学がこの Welcome Centre の企画案を非常に良く練ったという事実が反映されており、Welcome Centre 事業が目指す目的は、多くの大学にとって重要と認識されていると言える。

同 center は、前述のとおり、事業の検討に 2 年を要しているが、審査基準は次の 5 点である。なお、番号が若いものから重要度が高い。

- 1) Welcome Centre は学内の一貫した構造に組み込まれていること
- 2) 研究者支援に対象が絞られていること
- 3) 全く新しい試みではなく、既に幾ばくかの経験を有する支援手段に付加価値が加わった物であること
- 4) 地域の他の研究機関とのネットワークの構築が見られること
- 5) 2 年間の支援対象期間が経過しても学内において 1) で構築した構造的機能が永続するよう構築されていること

また、審査委員は次の 7 名である。

- ・ フンボルト財団、ドイツテレコム財団、ドイツ学術振興寄付連盟の機関長 計 3 名
- ・ 退職した大学国際課長 1 名
- ・ フンボルト財団元フェロー 2 名 (1 名は外国人、1 名は外国生活が長かったドイツ人)
- ・ ドイツ大学長会議 1 名

各企画書に特徴的な記述としては、前述のとおり、Welcome Centre を国際課又は学長室の直下に置く試みが多かったこと、特にバーチャルな組織と言うよりは、専門家の雇用又は同事業を実施する研究行政職の特に中間管理職の育成を含めた可視的組織の形成が多かったこと、ウェブサイトの構築、充実が多かったこととのことである。

採択 3 機関は、簡単にその特徴を挙げると、ボーヘム大学はバチュラーの学生に国際文化交流概念形成の経験を積ませる一環として検討させ、単位を与えるという企画を提案した。マールブルグ大学は逆に、退職した研究者にその経験を活かして貰うよう組織している。また、ボン大学は、近隣の研究所との協働に重点を置いている。これらの機関に対しては、可能な限りインタビューを予定しているので、今後も報告したい。

採択大学に限らず、全 32 大学の企画書の中から特筆すべきグッドプランをフンボルト財団が既にまとめている（前掲：「フンボルト財団応募結果報告書」ご参照）ので、参考に列挙する。研究者の流動性を高める環境整備に焦点が絞られている分、対策は詳細である。

- 1) ウェルカムセンターの役割、

- ・ 外国人研究者、学内研究者及び事務局の橋渡しをする。
- ・ 外国人研究者のために学内で調和が取れかつ継続的な事務手続きを実施するための方法を開発する中心となり、コーディネートポイントとなる。
- ・ 外国人研究者のためのウェブサイトの構築及び更新に責任を持つ。
- ・ 全大学の外国人研究者の登録に責任を持つ。つまり、各受入研究科は、受け入れた外国人研究者を、例えばデータベースにオンライン登録とするなど、**Welcome Centre**に登録することが必須となる。アクセス権は、外国人研究者とおしのネットワーク作成のため外国人研究者に与えるだけでなく、ウェルカムセンターと受入研究科との連絡のために、ウェルカムセンター及び受入研究科の責任者にも与える。また、このデータベースを窓会組織の作成のためにも役立て、マーケティング及び広報に役立てる。
- ・ 受入研究者のためのハンドブックを作成する。
- ・ 受入研究者に対する行政関連事項のクリア方法の指導や、事務局、受入研究者、学外関係者に対する異文化交流研修を実施するためのコンタクトポイントとなる。
- ・ 良く発生する問題を記録する。

2) 来独する外国人研究者に対するサービス

(来独前)

- ・ 大学、大学がある地域、幼稚園を含む学校に係る情報、来独前の準備に係る準備段階別の情報にアクセスできるウェブサイトの提供 (大学の求人情報もリンクに掲載)
- ・ 福利厚生諸情報、特別企画のチラシ、ハンドブックの提供、FAQとその回答の提供
- ・ 訪問中または帰国した外国人研究者のプロフィールへのアクセスし、連絡をしたり、ネットワークを構築したりする機会の提供

(訪問期間中)

- ・ 出迎えサービス、来独直後の数日間のための大学に近い宿舎の提供
- ・ 出身国別サービスの提供
- ・ 客員研究員 ID カードの提供
- ・ イベントカレンダーの提供 (**Welcome Centre**の説明会、来校時及びクリスマスの学長主催歓迎会、市長主催歓迎会、外国人研究者のための月例交換会 (昼食会)、外国人研究者のミーティングポイント (アカデミック・ラウンジ) の情報、著名人等来校時にセンター職員ともにユニバーシティ・モーニングの儀礼などに参加すること、著名研究者を招聘した場合は、市役所や美術館で市民講座を開催すること)
- ・ 市内のゲストカードやバウチャー
- ・ 特別契約を締結した幼稚園の住所の提供
- ・ 一年のいつ来ても始められる語学講座の提供
- ・ 大学の行政組織構造の説明会への招待
- ・ 翻訳等に係る雇用契約、期間契約の準備
- ・ 外国人研究者とその家族のためのドイツ特有の行動、エチケット、地域研究などに係る異文化交流研修の提供
- ・ 研究者の祖国を食べ物やエキシビションを通して紹介できるナショナル・デイへの招待
- ・ 特に、家族のためのガイドツアー、近郊へのエクスカーション、クラブや組織へのコンタクトを助けるため、国際クラブとの協力していることを情報提供すること
- ・ 大学の運動サークルなどに参加を (大学や社会に) 溶け込む機会として提供すること
- ・ 同伴者の求職のため、就職紹介所へのコンタクト
- ・ 登録済み研究者へのオンライン・ニュースレターの発行。記事の内容例: 現状、外国人研究者の経験談、地域のイベントの紹介とその文化的背景のコメント

(滞在期間の終了直前以降)

- ・ 帰国時のチェックリスト
- ・ リース契約解除の補助

- ・ フェローシップ事業の情報提供
- ・ 求人機関への推薦
- ・ 他の同大学滞在者とのコンタクト

3) 出国するドイツ人研究者に対するサービス

- ・ 外国へ出国するドイツ人研究者と同研究者が向う国から訪問している外国人研究者がコンタクト出来るよう、例えば、「外国人研究者による高等教育システム及び学術研究」などの講義シリーズを開催し、アレンジする。
- ・ 異文化交流研修の開催
- ・ フェローシップ事業の情報提供

なお、本事業については、1 月開始に続き、5 月末に経過報告会が予定されている。

♪ ドイツ研究協会 (DFG) が2007年ザイボルト賞受賞者を決定

http://www.dfg.de/en/news/press_releases/2007/press_release_2007_04.html
(DFGホームページ2007年1月25日)

日本人土木工学研究者である中村英夫教授とパウル・ドリュエ・ベルリン固体電子工学研究所前所長、クラウス・H・プローク教授は2007年度のザイボルト賞の受賞者に決定した。ザイボルト賞は、両国の科学と相互理解の発展に寄与した功績により授与される。この度は第6回目の受賞となる。賞金は1万ユーロ(約160万円)。DFGより授与される。

中村教授は40年以上に渡り日独の若手研究者の交流促進に努め、多くのドイツの大学との間で、サマースクールや交換プログラムを開拓し日独の学生が知り合う機会を提供した。この間、旧東独の研究者とのコンタクトを継続し日本に招聘するなど外交上の問題をいくつも克服しなければならないこともあった。中村教授は交通計画に携わり、1996年に名誉教となつてから、教授のために設置された東京の社団法人日本道路協会の会長も努めた。中村教授が開発したデジタル・ランドスケープ・モデルはドイツの交通計画にも適用されている。

パウル・ドリュエ・ベルリン固体電子工学研究所前所長、クラウス・H・プローク教授は日独間の集中的な科学協力のため、日本の研究機関に何度も訪問している。日独の研究者の恒常的な交流を組織するのに加え、特に半導体研究においては、両国間に多くの規制がある中でも、ベルリン日独センターの名誉科学部会長として複数の日独事業のオーガナイザーを努めるなど、共同研究の促進に尽力した。プローク教授は2006年末に名誉教授となった後も日本とのリンクを保ち続けており、現在は東京工業大学の客員教授である。

ザイボルト賞は、DFG会長で海洋地質学者であった、オイゲン・ザイボルト教授とその夫人、イルゼ・ザイボルト博士にちなんで名付けられた。夫妻は同賞の設立資金として15万ユーロ(約2,400万円)を寄付している。この資金は環境研究に対する賞としては世界最大の、日本旭硝子財団の「ブループラネット賞」—1994年にアメリカの環境保護家レスター・ブラウン氏(ワールドウォッチ研究所)と共にオイゲン・ザイボルト教授が共同受賞した際の40万ユーロ(約6,400万円)の一部である。ザイボルト賞は2年毎

に、際立った学術的成果を以って日独両国の相互理解の増進に貢献した日独各1名の研究者に贈られる賞である。

今年の授賞式は、5月2日にボンのドイツ・ミュージアムにおいて開催される。

♪ ヨーロッパ研究協議会（European Research Council: ERC）の発足会議

<http://erc.europa.eu/index.cfm?fuseaction=page.display&topicID=101>

(ERC ホームページ)

http://www.dfg.de/en/news/press_releases/2007/press_release_2007_07.html

(DFG ホームページ Press Release No. 7)

12 February 2007

小野理事長への随行出張による会議参加に基づく

(2月25日～28日)

2月27日及び28日に、ベルリン・ブランデンブルク学術アカデミー(BBAW)に於いて欧州研究評議会(the European Research Council:ERC)の発足会議がドイツ連邦教育省、ERC 及び欧州の研究機関共催の形で開催された。同評議会は、欧州に於いて初のボトムアップの全分野を対象にした研究支援機関として関係機関の関心を集め、約30カ国から200人以上の研究者、研究振興機関関係者が出席した。

メルケル首相の開会の辞に始まり、ヤネツ・ポトシュニック(Dr. Janez Potocnik)欧州科学研究委員、フォティス・カファトス(Prof. Fotis Kafatos) ERC 会長、マティアス・クライナー(Prof. Matthias Kleiner)DFG 会長、アングリカ・ニーブレル(Dr. Angelika Niebler) 欧州議会議員がそれぞれ祝辞を述べた。

発足会議の議題は次の3点であった。

- 1) 研究を基盤とした社会経済の発展を目指して ERC は如何なる貢献が可能であるか、
- 2) ERC は欧州に於ける将来のイノベーション研究の原動力として如何なる役割を果たすことができるか、
- 3) 国際協力及び国際競争の中にあつて、ERC は欧州における研究に如何なる役割を果たすことができるか、

各議題は、各国の研究振興機関代表及び若手研究者代表を含む研究者をパネリストとして迎え、パネルディスカッション形式で議論された。JSPS の小野元之理事長は日本の研究振興機関代表として、3) セッションのパネリストとして招待された。

1) 及び2) に関しては、欧州自身の問題として捉えられている一方、3) は、全世界的観点に立った意見として、マックス・プランク研究協会(MPG)のグルス会長や元 DRG 会長で現 ERC 事務総長のヴィネッカー会長など、欧州域内の研究振興機関等の意見も求められている一方、欧州以外の国からどのように捉えられているのか？脅威として捉えられているのか？関心があるのか？という第3者の目に ERC 首脳陣の関心が向けられていることを物語る。

これは、ERC が支援する共同研究が、欧州以外の研究者にも欧州の研究機関に所属する限り申請する機会が与えられていることがインセンティブとして働き、欧州へ優秀な研究者を集める呼び水としての機能を有するためと推量される。

欧州の動きが、ブレイン・ドレインというネガティブ・インパクトを与えるか、ブレイン・サーキュレーションというポジティブ・インパクトを与えるかという問題は、同じ現象を観念的、主観的に如何に捉えるかという問題である。仮に相手が欧州全体を取り巻く ERC でなかったとしても、そもそも学問の本質として、パートナーは一面競争相手であり、一面協力相手である。JSPS は、今後の JSPS と ERC の競争と協力の両面の可能性を示しつつ、ERC に対するパートナーとしての期待を表明したが、我が国の発言は ERC の懸念に対して端的に回答を出したものと思料する。

2003 年に ERC 発足準備専門家会は次のとおり報告している。「これまで「ヨーロッパ」であることの付加価値は（域内の）異なる国との協働ができることにあったが、今やその付加価値は、ヨーロッパにいる研究者が協力して全世界の優秀な研究者と競争することという新しい定義により認識されることとなる。（拙訳：原文は、” Until now European added value has been collaboration between different countries. It is now time to bring a new definition of added value, one that incorporates the principle of allowing a researcher in any European state to compete with all other researchers on the basis of excellence” . (ERC Expert Group Report 2003))

サイテーションと成果の相関関係の議論を抜きにしてよければ、英国主席科学顧問 Sir David King による、今回の発足会合のディナースピーチを引用すると、全世界における各国別の全世界のサイテーション・シェアの割合（元資料記載なし）は、米国は 49.4%。これに対し EU 先進国は 15 カ国を併せても 39.3%である（ちなみに、ドイツは 10.0%で国別では英国に続き 3 位、日本は 8.4%で 4 位。）。要するに、世界の信頼に足る先進学術は 50%弱が米国、40%弱が欧州、8%が日本で残り 3%がそれ以外の国に於いて実施されているという報告と読め（ただし、カナダが 5.5%とされているので、単純に 100%にはならない。）、世界のどこに研究者が集まっているかを物語っている。

欧州が一丸となったとしても、「欧州のどこか？」は結局問題になるため、域内の問題を如何に処理するかは ERC の課題となると言える。各国の研究振興機関は従って ERC と自らの関係の距離を如何に採るかをまだ推し計っており、ERC が自らを凌駕することに脅威を感じている機関も見受けられる。また、優れた研究機関を多数有する MPG のグルス会長は、ERC にとっては、Excellency, Autonomy, Funding の三つの観点が重点であると述べた。学術上の欧州内一極集中が起こった場合の「政治」の介入を懸念していると読むのは、深読みだろうか？

ERC の発足に際し、DFG の役割は極めて大きく、ERC は独立したピアレビューを以て支援するといった DFG の原則をその支援原理に取り入れている。今後は、各国の支援機関と ERC との間に良好な協力関係が気づけるか否かが ERC の成功の重要な鍵を握っている。

発足会議前日の 27 日に欧州委員会はプレス会議を開き、アネッテ・シャバーン（Dr. Annette Schavan）連邦教育大臣、欧州科学研究委員や ERC 及び DFG 会長が出席した。

JSPS の小野理事長も同会議に出席し、シャバーン大臣、ヴィネッカー ERC 事務総長、クライナー DFG 会長、グリュンバルト DFG 事務総長と歓談し、親交を深めた。

3. ボン研究連絡センターの活動

♪ 来訪&訪問、会議出席等

【10 月】

10 月 02 日（火）	Ganter 職員がドイツ JSPS 同窓会幹部会合出席（於コンスタンツ大）
10 月 03 日（火）	小山、ドイツ到着
10 月 05 日（木）	・元 JSPS ボン研究連絡センター・センター長・新井栄一氏来訪
10 月 05 日（木）	・小山がベルリン日独センター 上田浩二副事務総長往訪（於 ベルリン）
10 月 06 日（金）	・田中所長がアーヘン工科大学ー慶応義塾大学交流 50 周年記念式典出席（於アーヘン）（～7 日）
10 月 06 日（金）	・小山、Ganter 職員が DFG 主催 IRTG フォーラム出席（於 ベルリン）
10 月 09 日（月）	在独日本大使館氷見谷一等書記官来会
10 月 10 日（火）	田中所長が AvH フェローシップ選考会に出席（於 ボン）
10 月 11 日（水）	小山が CNRS ボン事務所 Dr. Bougeard 所長を往訪
10 月 16 日（金）	・田中所長一時帰国（宇宙航空研究開発機構及び JSPS 東京本部訪問）（～25 日）
10 月 16 日（金）	・NRW 州イノベーション、学術、研究・技術省主催「日本におけるドイツ年成果発表会」に小山、Ganter 職員、伊藤国際協力員、中川国際協力員が出席（於 デュッセルドルフ大学）
10 月 26 日（木）	田中所長、小山、Ganter 職員が日独コロキウム打ち合わせのため、ミュンヘン工科大学 Prof. Dr. M. Buss 教授、Prof. Dr. H. Ulbrich 教授等往訪（～27 日）（ミュンヘン）

【11 月】

11 月 02 日（木）	・丹生久美子研究協力第二課長、清水和子同係長、小山、中川国際協力員が DFG Dr. Werberger 部長等往訪（於 ボン）
11 月 02 日（木）	・丹生久美子研究協力第二課長、清水和子同係長と共に田中所長、小山が第 10 回日独先端科学(JGFoS)シンポジウム出席（～05 日）（於 ハイデルベルグ）
11 月 07 日（火）	小山、Ganter 職員が日独産業協力推進委員会創立 20 周年記念会出席（於 デュッセルドルフ）
11 月 08 日（水）	Ms. Eberlein(DAAD) 及び Ms. Yokoyama(DAAD 東京) 来会
11 月 09 日（木）	・人物交流課角田係長、幸係長来会
11 月 09 日（木）	・在独日本大使館氷見谷一等書記官及び R. von Buelow 職員と小山、伊藤国際協力員が会合（於 ボン）
11 月 09 日（木）	人物交流課角田係長、幸係長来会と共に、田中所長、小山、Ganter 職員が同窓会幹部会(09 日)出席（於 デュッセルドルフ）
11 月 10 日（金）	・田中所長、小山、Ganter 職員、伊藤国際協力員、中川国際協力員がデュッセルドルフ大学における事業説明会(10 日)開催
11 月 10 日（金）	・田中所長、小山、Ganter 職員、伊藤国際協力員、中川国際協力員 J S P S ドイツ同窓会主催「会員による会員の招待」（10 日～11 日）出席（於デュッセルドルフ）

11 月 13 日 (月)	小山、Ganter 職員、Schulze 職員がドイツ研究会(German Research Organisations-KoWi) 移転に伴う開所式往訪 (於 ボン)
11 月 17 日 (木)	井上博允監事と共に、田中所長、小山、Ganter 職員、伊藤国際協力員、中川国際協力員が第 4 回日独コロキウム「ロボティクス」開催 (～22 日(コロキウムは 18 日～20 日)) (ミュンヘン)
11 月 28 日 (火)	小山が語学研修開始 (3 月まで)
11 月 30 日 (水)	Prof. Menkhaus ドイツ同窓会会長来会

【12 月】

12 月 02 日 (日)	田中所長が一時帰国 (JSPS 東京本部及び宇宙航空研究開発機構訪問ほか) ※調査研究費による (～9 日)
12 月 05 日 (火)	神戸大学代表团 (川嶋太津夫神戸大学学長補佐、浅野茂助手、前田直子国際部国際企画課国際企画係員) 来会
12 月 06 日 (水)	小山、Ganter 職員、Schulze 職員が AvH の年末パーティに出席 (於 ボン)
12 月 08 日 (金)	伊藤国際協力員が University of Applied Sciences Gelsenkirchen 取材 (研修課題調査)
12 月 13 日 (火)	小山、Ganter 職員がドイツ研究会(German Research Organisations: KoWi)主 ERC 事業説明会出席 (於 ボン)
12 月 18 日 (月)	・田中所長が一時帰国 (JSPS 東京本部及び名古屋大学訪問ほか) ※他機関経費による (～26 日)
12 月 18 日 (月)	・伊藤国際協力員が University of Bonn 取材 (研修課題調査)
12 月 19 日 (火)	小山が DFG Dr. Winnaker Farewel Party 出席 (於 ボン)

【2007 年 1 月】

1 月 10 日 (木)	Prof. Karanis (ケルン大学・帯広畜産大学) が来会
1 月 12 日 (金)	田中所長、小山が駐独日本大使館名刺交換会出席 (於 ベルリン)
1 月 23 日 (火)	小山、Schulze 職員がケルン大学及びボン大学主催 研究・留学フェアに於いて事業紹介 (於 ケルン)
1 月 24 日 (水)	伊藤国際協力員が University of Siegen 取材 (研修課題調査)

【2 月】

2 月 02 日 (金)	小山、Ganter 職員がドイツ研究協会 (DFG) 主催、ドイツ物理学会 (DPG) 推薦若手研究者日本派遣団フォローアップミーティングに於いて事業説明 (於 バード・ホーネフ (ボン近郊))
2 月 06 日 (火)	・田中所長がフンボルト財団フェローシップ (JSPS 外特を含む) 選考会出席 (於 ボン)
2 月 06 日 (火)	・小山、Ganter 職員がフンボルト財団新事業取材 (於 ボン)
2 月 08 日 (木)	松尾国際事業部長、清浦研究協力第一課長、金子同係長来会
2 月 09 日 (金)	上記とともに小山、Ganter 職員が DFG 往訪 (於 ボン)
2 月 19 日 (月・祝)	早稲田大学代表团 (大野高裕国際部長・理工学術院教授、長塚博道国際部事務部長、戸枝久郎国際課長、原田勉同国際課員、毛利裕昭同大学ヨーロッパセンター長、A. N. Springmann 同センターマネージャー) 来会
2 月 20 日 (火)	田中所長が、20 years after SN 1987A 会議 (招待講演)、国立天文台ハワイ測所 (セミナー講演)、カリフォルニア工科大学 (コロキウム) 出席 ※調査研究費による (～3 月 2 日まで)

2 月 21 日（水）	岐阜大学代表团（野田誠一産官学融合センター教授・知的財産マネジメントオフィス室長、川上省吾同産官学連携コーディネーター、日下部由泰知的財産マネージャー）来会
2 月 23 日（金）	・小山、Schulze 職員が Koenigs DFG 第 2 部局長及び Suang-Jing Pong 台湾科学審議会（NSC）ドイツ事務所長他と会合（於 ボン）
2 月 23 日（金）	・堀川直顕駐大学教授 来会
2 月 23 日（金）	・Gantert 職員がドイツ同窓会幹部会に出席（於 フランクフルト）
2 月 25 日（日）	欧州研究会議（ERC）設立会議への小野理事長ご出席に係る随員（26 日～28 日）及び氷見谷一等書記官との事前打ち合わせ（25 日）（於 ベルリン）

【3 月】

3 月 05 日（月）	・大阪大学代表团（林正一郎財務部資金管理課長補佐、滝本健治総務部人事課企画第 3 係長、辻敏彦研究推進・国際部国際交流課員、地石雅彦グローニンゲンセンター長）来会
3 月 05 日（月）	・斎藤主計課監査係長、井出会計課職員来会（～06 日）
3 月 08 日（木）	京都大学代表团（金子勉助教授、小倉一夫財務部財務戦略・分析課戦略・分析グループ長、中村正次企画調査・評価部企画課専門職員、野田稔貴研究推進部研究推進課専門職員、佐久間義弘掲題学研究科職員）来会
3 月 22 日（木）	・田中所長、小山が DFG Kleiner 会長を表敬訪問（於 ボン）
3 月 22 日（木）	・在独日本大使館氷見谷一等書記官来会
3 月 23 日（金）	小山、Ganter 職員、Schulze 職員が第 12 回日独シンポジウム開催地に於ける事務打ち合わせ（～24 日）（於 バンベルグ）
3 月 26 日（月）	田中所長、小山、Ganter 職員がケルン日本文化会館 館長交代式に出席（於 ケルン）
3 月 28 日（水）	伊藤国際協力員、中川国際協力員 帰国

♪ 第 3 回日独先端科学（JGFoS）シンポジウム出席

2006 年 11 月 2 日（木）から 5 日（日）まで、日本人には大学街として名高いハイデルベルグに於いて第 3 回日独先端科学（JGFoS）シンポジウムが開催されたところ、当センターから田中所長と小山が出席した。2005 年 2 月に第 1 回 JGFoS シンポジウムが開催されて以来、JSPS がフンボルト財団（AvH）との協力において毎年 1 回日独交互に開催している 45 歳までの比較的若い研究者を対象とした 3 日間のプログラムで、異なる 6 先端分野のトピックを日独両国からの研究者がそれぞれ紹介し、刺激を与え合うことで、異分野への理解寛容度を高め、願わくは新領域の創世に寄与することが目的とされている。

同シンポジウムは、伊賀理事が JSPS 側の代表として、Dr. Janetzke 副理事長が AvH 側の代表として開会の挨拶を述べ、開始された。既に前夜のレセプションから参加研究者間の交流は急速に進化、拡大し、シンポジウムのセッション中の質疑応答にはマイク位置に毎回長蛇の列ができ、参加者が異なる分野における学術の動向に対する関心を刺激したものと推測できる。

JSPS はアメリカやフランスとの間でも Frontiers of Science Symposium を実施しているが、ドイツとのシンポジウムで特徴的なのは、セッションの形態などの他に、フンボルト財団が用意している CONNECT プログラムという同シンポジウム参加者の間で生まれた協力

関係を相手国共同研究者訪問という形で実現できる仕組みにある。息の長い共同研究が生まれることを願いたい。

♪ デュッセルドルフ大学に於いて大学及び日本関係事業説明会開催

11 月 10 日に、デュッセルドルフ大学に於いて、日本で勉強又は研究することに興味を持っている学生及び研究者を対象に、当センターの他、次の機関が参加して大学及び事業説明会を実施した。

- 1) 早稲田大学 ヨーロッパセンター・ボン
- 2) 大阪大学 グローニンゲン・センター
- 3) 山口大学
- 4) 新潟大学
- 5) 日本大使館（ジェット・プログラム、ワーキング・ホリデー等）
- 6) 日本学術振興会

本催しは、当センター所長の挨拶にはじまり、上記機関によるプレゼンテーション形式での大学及び事業説明、資料配布を中心に、約 30 名で実施した。J S P S ドイツ同窓会からメンクハウス会長も参加して日本に於ける滞在経験に関する質問への回答に協力して下さった。

なお、3) 山口大学及び 4) 新潟大学は、当センター国際協力員の 2 名が自身の大学の協力を得て、大学説明にあたったものである。



写真は、所属大学の説明をする
中川国際協力員（新潟大学 左）と
伊藤国際協力員（山口大学 右）

♪ JSPS ドイツ同窓会事業「会員による会員の招待」参加

11 月 10 日～11 日は、デュッセルドルフに於いて、JSPS ドイツ同窓会事業である「会員による会員の招待(Mitglieder laden Mitglieder ein)」が実施された。今回は、初めて大学等学術研究以外の研究機関所属の同窓会員が招待者となり、デュッセルドルフにあるフランスに本社がある化粧品メーカー L'OREAL のドイツ支社の研究所に勤務する J S P S ドイツ同窓会員(Dr. Ludger Neumann)が招待者となった。

本催しは、本会事業経験者に対し、J S P S ドイツ同窓会に入会を促すインセンティブを与える意味もあり、同窓会会員のみに参加資格がある会合である。160 人の会員のうち、50 名以上が参加した。全ドイツ唯一の浄土真宗の寺社である「Eko Haus（恵光院）」を訪れ我が国の仏教についての講演を聴いた後、附設の日本庭園及び日本から移設した古民家を訪問し、近代の日本人の暮らしに係る説明を受けたあと、L'OREAL ドイ

ツ支社へ移動し、Dr. Neumann による「Gio-cosmetics（皮膚や毛髪の性質、および習慣の民族による差異を研究する）の講演に参加。ちなみに、日本の SHU UEMURA も L'OREAL の傘下にある。翌日は Dr. Neumann の専門になる毛髪の研究施設を訪問し、再度、Dr. Neumann による講演及び研究ビデオの説明が実施された。いずれの講演においても参加した同窓会員からは非常に活発な質問が寄せられた。



写真 左 Dr. Neumann の講演
下 講演を聴く同窓会員



♪ 第 4 回日独コロキウム「ロボティクス」開催

ボン研究連絡センターは毎年日独コロキウムを開催している。本年は 11 月 18 日から 21 日にかけて、ミュンヘン郊外のイスマニングにおいて、第 4 回日独コロキウムを「ロボティクス」をテーマに開催した。日独から 20 代後半から 40 代前半で若手のロボティクス分野の研究者が参加し、熱い議論が展開された。

本コロキウムのオーガナイザーは、井上博允振興会監事（東京大学名誉教授）及びドイツ航空・宇宙センター（DLR: Deutsches Zentrum für Luft-und Raumfahrt）の Gerd Hirzinger 教授が、コーディネータは、金子真大阪大学教授 及び Martin Buss ミュンヘン工科大学教授が担当し、参加者の人選およびプログラム作成を行った。発表者は、日独両国からロボティクス分野の若手研究者 23 名が選ばれ、会議は、「ロボティクス」分野が包含する分野横断性を意識して、次のとおり四つのセッションにより構成された。

- 1 日目：（1）Hightech Robotics、（2）Human-Robot Joint Action
- 2 日目：（3）Brain Science and Robotics、4）Ubiquitous Robotics

先端的成果の発表に続き、質疑応答は非常に白熱した。インスピレーションを刺激されたという感想が多く、また本コロキウムを通して、興味を共有する日独研究者間で具体的に共同研究を開始すべく休憩時間やセッション終了後に計画を立て始める組がいくつも見られた。日独両国がリードする研究分野における本コロキウムの開催を契機として新たな共同研究の展開が期待される。

特に、分野横断的に若手研究者全員が高密度に議論できる規模であったことから、参加者全員が非常に親しくなり、第 2 回のセミナーの日本開催が自発的に検討されている。

なお、ドイツ側コーディネータ Buss 教授は、東京大学大学院博士課程後期に在籍した元 JSPS 特別研究員であり、つまり日本人特別研究員と同様に面接を受け採用された最初の外国人の 1 人である。余談ながら奥様も日本人で、流暢な日本語を駆使される。今年度同研究室から JSPS 外国人特別研究員欧米短期により 7 ヶ月間日本に滞在したポスドク研究員も

輩出しており、同研究員は Buss 研究室の取り纏め役を担っている。この度のコロキウムに於いても Buss 教授をサポートし、ドイツ側の若手研究者の取り纏めもこなしてくれた。JSPS フェローの研究室に次世代の JSPS フェローが研究室を背負う立場の若手研究者として大きな役割を果たしていることを見るのは、JSPS としては非常に喜ばしいものである。Buss 教授及び同研究員は、コロキウム終了後、晴れて JSPS 同窓会に入会した。

余談であるが、Buss 教授は、DFG の Senate でもある。ドイツに於いて重職に就いている研究者が JSPS の支援を受けたことがあるということは、JSPS にとっても非常に喜ばしいことではないだろうか。



写真は、全参加者。最後列の赤いワイシャツを着用しているのが Buss 教授。その斜め前の斜め縞模様のネクタイの人（中列右から 6 番目）が金子教授。最前列右から 4 番目が Buss 研究室から輩出された欧米短期フェロー。なお、JGFoS のドイツ側 PGM 主査であるミュンヘン工科大学の Knoll 教授（最後列左から 5 番目）は、11 月 22 日の研究室訪問に協力してくれた。

♪ ケルン大学及びボン大学による研究・留学フェアに於いて事業説明

1月23日にケルン大学及びボン大学共同により、外国に於いて研究の実施の可能性を探しているおもに博士課程在籍の学及びポスドク研究者を対象に研究・留学フェアが開催された。この催しには、朝9時半から夕方17時半までのフェアで、各機関30分ずつの事業の紹介時間が設けられた。

午前中は、ケルン大学国際担当副学長Prof. Dr. B. Dauner-Liebによる挨拶に始まり、DAADが「国際的な学術振興の意義」を、ダルムシュタット工科大学のDr. Bohlingerによる「研究者交流の促進の政治的目的」の講演、ノルトライン・ヴェスト・ファーレン州イノベーション学術研究テクノロジー省Dr. Gruenewaldによる「NRWにおける国際大学院」などの紹介があったあと、DFGのIRTGプログラム、MPGによる「マックス・プランク国際スクール」、DAADから外国において研究出来るプログラム、AvHから「欧州流動性ポータル及びマリーキュリー後援者データベース」、HRKから「二国間交流の促進及び国際共同大学院博士号（die Cotutelle de Thèse）*」といった、ドイツの機関による支援事業の紹介のあと、B. A. Z. アメリカハウスから「カナダ及びアメリカにおける支援可能性」、英国ランカスター大学より「イギリスにおける支援可能性」等があり、外国の機関による紹介は、英米日の3カ国であった。更に、ドイツ国外人文科学研究所による「DGIA財団による人文科学振興フェローシップ」の説明があった。

なお、日本での研究に関しては、ケルン大学には、帯広畜産大学原虫病研究センター教授の（ギリシャ系）ドイツ人のProf. Dr. KaranisがJSPS事業説明直後に、日本で研究者として研究している経験について講演し、自然科学分野の研究を日本で実施すること

にドイツの若手研究者の興味を惹くことに貢献してくれた。また、国際交流担当教員である Dr. Bildhauer は JSPS ドイツ同窓会員であるため、小山が事業説明を実施した後の質問事項で、「日本語はどの程度勉強する必要があるか？」という質問などには、ご自分の例も（弘前大学滞在）語ってくれるなど、協力してくださった。

質問事項は、上記をはじめ「日本語はどの程度勉強する必要があるか？」「日本の大学のリストや研究機関のリストはあるか？」といった、より基本的な質問が多かった。前者については、経験者に語って頂くのが良いため、このようなときに JSPS 同窓会員が協力してくださるのであればありがたい。後者に関しては、次の 2 つのサイトを紹介するようにしている。

- 1) 本会の招へい事業のサイト中「List of Home Institutes」
http://www.jspss.go.jp/english/e-inv/adoption_set.htm
- 2) 学生支援機構 (JASSO) ウェブサイト中英語版大学検索ページ
http://www.jasso.go.jp/cgi-bin/user/univ_search.cgi

なお、「日本での生活」に関してはなお不安は多く見受けられ、「Life in Japan」は好評であった。

* die Cotutelle de Thèse（仮訳 国際共同大学院博士号）

フランスの教育及び高等教育研究省が 2005 年 1 月 6 日に定めた制令 (decree)。欧州の高等教育の構造強化を図るため、フランスの大学（等研究機関）と他国の大学（等研究機関）とが共同指導にあたることで、国際的な二大学又はそれ以上の大学において、同制令に定められた方法を用いて締結された機関間の協定に基づき共同の博士号を授与することを可能にしたもの。協定を締結した大学が連名で一つの博士号を授与されていることが証明される。なお論文がフランス語でない場合、サマリーはフランス語で有ることが必須。本件については、HRK のウェブサイトに掲示されている。

- 1) ドイツ語版 HRK 加盟大学向け説明
http://www.hrk.de/de/service_fuer_hochschulmitglieder/156.php
- 2) 制令英語版
http://www.hrk.de/de/download/dateien/Arrete_des_frz_Bildungsministeriums_zur_Cotutelle_Jan2005_engl.pdf

♪ ドイツ研究協会 (DFG) 主催、ドイツ物理学会 (DPG) 推薦若手研究者日本派遣団フォローアップミーティングにおける事業説明参加

2 月 2 日にボン近郊のバード・ホーネフ (Bad Hohnepf) のドイツ物理学会 (DRG) に於いてドイツ研究協会 (DFG) 主催、ドイツ物理学会 (DPG) 推薦若手研究者日本派遣団フォローアップミーティングが実施され、今後の日独協力を進めるための支援の機会を提供するため事業説明の要請があり出席した。DFG によるこの日本派遣事業は以前にも、化学分野に於いて実施された。なお、同日本派遣団を構成するメンバーは、ドイツのポストドク等若手物理学研究者のうち、日本に興味を持ちかつ最高水準にいる 10 名で、10 月から 12 月までの 3 ヶ月間日本の研究機関に滞在し、研究計画を遂行した。選考から実施に至るまで、JSPS ドイツ同窓会の会員で元会長である Prof. Dr. U. Czarnetzki（ボーヘム大学）によ

る尽力が大きく、このたびの事業説明の要請も同教授による働きかけが大きかったと見られる。

同フォローアップ・ミーティングに於いては、日本の研究機関に於ける研究水準に係る問題は議論されなかったが、コミュニケーションの問題は大きく取り上げられた。通常、日本語の壁は、研究機関においてでなく日常生活を営むにあたり、特に都市部から離れた地域に於いて問題を生じるものと認識していたところ、ある研究者は、派遣された研究機関に於いて英語を「話せる」研究者がいなかったため、コミュニケーションは「e-mail」で行ったとのことであった。同研究者は日本語を独学しており、むしろ日常生活において最低限必要な日本語の読解及び会話は可能であるため、日常生活の不自由よりも研究生活の不自由があった点を挙げた。同研究者が訪問した研究機関は、適当な実験施設が世界にも多くはないことから極めて限られた訪問先である。外国の研究者から来日研究のニーズがあるにも関わらず、日本側研究室がコミュニケーションが不自由であることは、研究者の流れを阻害することとなるため、潜在的に多くの研究者が選択を諦めているのではないかと感じた。ただし、他の派遣者からはそのような点は挙げられなかったので特異なケースとも認められる。

なお、言葉以外の問題として、現時点ではドイツに於いては博士号取得には非常に時間が掛かりポストドク研究者は大変年齢が高い。博士号取得時点で配偶者等がおり既に他の仕事を持っている場合があることから、日本に興味を持ち、日本での研究を志しても長期間ドイツを離れるインセンティブが働きにくいことが挙げられた。外国人特別研究員事業に欧米短期が設けられていることは、こうした現状からも歓迎されている。

♪ 田中所長、小山がDFG Kleiner 新会長を表敬訪問

3 月 22 日にドイツ研究協会（DFG）に於いて、Matthias Kleiner 新会長を田中所長及び小山が表敬訪問した。この度の訪問に於ける主な議題は、①COE の形成について、②DFG との協力について、③G8-HORCs への DFG 提案トピックに関する背景・真意について、の 3 点とした。クライナー会長は多忙な中で 1 時間以上を割いて割いてくださり、しかも予想外のことであったが、会談終了後に予定を切り盛りして昼食もご一緒頂いた。会長の日本及び JSPS に対する関心の高さが伺えた。会談の要点は次のとおり。

①COE の形成について

エクセレンス・イニシアチブは、ドイツの学界を改革する強い影響を与えている。しかし、「将来構想」は、国際競争を主眼に置く意味では大切ではあるが、注目されすぎている感がある。学術的観点からは「大学院」及び「エクセレンス・クラスター」も重要である。DFG が支援する事業の全てのファンドがエクセレントである。この事業の新しいところは、それが組織的拠点形成という方向性を持ったということにある。したがって、多彩な組織、多様な学問分野にわたる支援であることが重要。

現代、学問の中心がアメリカに集中している原因は、個人的には三つあると考えている。一つめは、「学問は優れた一個人により開拓される」ことにあり、歴史的にドイツからは優秀な研究者が次々と去ってしまったことにあり、二つめは、近代科学が「チームワ

ーク」が必須になっていることにある。ドイツとアメリカでは組織のスタイルが異なっている。ドイツに於いては、教授の下に築かれたヒエラルキーの中で研究が実施されている反省から、若手研究者を育成し、研究組織を再構築を試みている。三つ目は、資源不足にある。より多くの資金と自由が必要である。特に「大学の自由」に関しては、政治は前面に出るべきではない。

②DFGとの協力について

特定分野をテーマに日独「ラウンド・テーブル」を実施してはどうか？ DFG では、各国 10 名ずつ、計 20 名で小規模セミナーを毎回分野を選んで実施している。「ラウンド・テーブル」は、知識の交換をすることと、そこから協力が生まれることを期待している。DFG では、各地域代表幹部が、是非促進したい分野が有る場合、ラウンド・テーブルを設け、同研究分野を如何に促進するかを話し合う。ここで話し合われたことは、「通常の」申請で活かされる。例えば、トピックとしては、今世界が抱えている問題（エネルギー、環境問題、生物多様性など）を取り上げ、日独双方から 3 トピックずつ計 6 トピックを持ち寄りうち、2 トピックを採用、日本がイニシアチブを取るトピックを 1 つ、ドイツがイニシアチブを取るトピックを 1 つ選択し、2 日間実施、日独交互に毎年度開催する。というのはどうか？

本件については、実現に向けて検討中である。

また、ボン研究連絡センターの活用と東京に設立可能性が検討されている「ジャーマンハウス」の活用が話し合われ、また JSPS ドイツ同窓会の紹介もされた。

なお、昨年 8 月に日本を訪問したときに受けた印象は、訪問した大学の学長が皆さん将来構想を明確に抱いていることであった。どこの機関でもそうであったことに非常に感銘を受けた。とのことである。

③G8-HORCs への DFG 提案トピックに関する背景・真意について

“Science and Research Management Training for Scientists”の提案の背景は、近年、研究の規模が大型化し、研究者自身の Management の重要性が高まっていることにある。研究プロジェクトのマネジメントは本来そのプロジェクトの目標、内容を熟知している科学者自身が行うことが最も望ましいと考えている。しかしマネジメントには専門知識が必要である。そのためのトレーニングが必要であるということだ。DFG の幹部もマネジメントの教育を受けている。ドイツには Speyer(Rheiland-Pfalz 州)にある大学にマネジメント専門コースがあって、ここで系統的に学ぶことができる。このように今後ますます必要性が高まる科学者によるマネジメントについて、能力育成、その方策をトピックに取り上げた次第。

◎その他の活動

- ・ 日本学術振興会パンフレット等の対応機関等への配布
- ・ 情報提供ホームページ” forschen-in-japan.de” の拡充作業
- ・ ドイツ語版ニューズレター（ルンド・シュライベン）等の作成・配布
- ・ 各種照会、各種情報収集・調査、各種情報提供業務
- ・ 日本学術振興会事業の広報（資料出展、HRK ニュースレター掲載ほか）

- ・ ドイツ訪問者に対する便宜供与、訪問アレンジ
- ・ 第 4 回日独コロキウム (2006 年 11 月開催) 報告書作成
- ・ 第 11 回日独シンポジウム (2007 年 5 月開催予定) 開催準備
- ・ JSPS サマープログラム・プレオリエンテーション (2007 年 5 月開催予定) 開催準備
- ・ JSPS ボン研究連絡センター年次報告会 (2007 年 8 月開催予定) 準備
- ・ JSPS 事業説明会 (2007 年 10 月開催予定) 準備
- ・ DFG とのラウンド・テーブル開催準備

4. 今後の予定

2007 年

- 04 月 01 日 (日) 福島末知子国際協力員 (京都大学) がドイツに到着
- 04 月 04 日 (水) ベルリン日独文化センターに於ける会議 (於 ベルリン)
- 04 月 16 日 (月) AvH 主催フェオドア・リューネン・フェロー 派遣前オリエンテーション (JSPS 外国人特別研究員を含む) 及び帰国者報告会出席 (～18 日) (於 ボン)
- 05 月 02 日 (水) 1) DFG 主催ザイボルト賞授賞式典参加 (於 ボン)
2) マールブルグ大学「ウェルカムセンター」訪問取材 (於 マールブルグ大学)
3) マールブルグ大学 Japan Centre 主催中央大学法学部教授丸山秀平氏への永年日独交流感謝表彰式参加 (於 マールブルグ大学)
- 05 月 03 日 (木) DFG Kruessmann 国際課長と打合わせ (於 ボン)
- 05 月 04 日 (金) 全国大学長会議 (HRK) 総会に於いて事業資料ブース設置 (於 ギーセン大学)
- 05 月 11 日 (金) 第 12 回日独シンポジウム (気候変動) 開催 (於 バンベルグ) (～12 日)
- 05 月 12 日 (土) JSPS ドイツ同窓会総会開催 (於 バンベルグ)
- 05 月 21 日 (月) ボン大学「ウェルカムセンター」訪問取材 (於 ボン大学)
- 05 月 23 日 (水) ボーヘム大学「ウェルカムセンター」訪問取材 (於 ボーヘム大学)
- 05 月 23 日 (水) 田中壮一郎文部科学審議官来訪
- 05 月 24 日 (木) DFG Koenigs 第二部局長と懇談 (於 ボン)
- 05 月 24 日 (木) JSPS サマープログラム・プレオリエンテーション開催 (於 ボン)
- 05 月 31 日 (木) AvH 主催「ウェルカムセンター」事業経過報告会参加 (於 ボン) (～6 月 1 日)
- 06 月 13 日 (水) 連邦教育省 Dr. Zingsheim 氏との懇談 (於 ボン)
- 06 月 22 日 (金) ベルリン日独センター主催、連邦教育省協力「ジュニア・エキスパート交流事業 2007」に於ける事業紹介 (於 ボン)
- 07 月 02 日 (月) JSPS ドイツ同窓会幹部会開催 (於 ボン)
- 7 月 田中所長センター長会議出席 (予定) (於 東京)
- 8 月 ノルトライン・ヴェストファーレン州研究省 Ms. Munsel 国際副課長表敬 (予定) (於 デュッセルドルフ)
- 08 月 15 日 (水) JSPS ボン研究連絡センター年次報告会開催 (於 ボン)
- 10 月 19 日 (金) JSPS 事業説明会開催 (於 ライプツヒ大学) 及び JSPS ドイツ同窓会。る「会員による会員の招待」参加 (～20 日) (於 ライプツヒ)
- 11 月中旬 DAAD 主催「国際課長会議」において「大学国際戦略本部強化事業」

及び「我が国の留学生課」に関し説明 (予定)
11 月 26 日 (月) AvH 主催フェオドア・リュネン・フェロー 派遣前オリエンテーション
(JSPS 外国人特別研究員を含む) 及び帰国者報告会出席 (～27 日)
(於 ギーセン)

秋又は冬 第 5 回日独コロキウム又は DFG 共催第 1 回ラウンドテーブル開催

2008 年

春 JSPS サマープログラム・プレオリエンテーション開催
5 月 第 13 回日独シンポジウム開催